一統

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可　毎月一回　十五日）
（明治卅八年三月十五日發行　統一第百二十號　毎月一回十五日）

第百二十號要目

○日蓮上人の教義一班（完結）……本多日生
▲惠光照無量……古定賢正
○日蓮上人の宗義及系統（承前）……本多日生
▲佛教家庭論……記者
○日什大正師置文諷誦章（承前）……阪本日垣
▲各地教信……
○不受不施史料（其三）……梶木日種

御雛附ぞく
人形
小道具

武者人形
東羽子板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店
久月本店
中原福藏
（電話本局二千三百八十二番）

廣告

歳末に付き會計上整理の都合有之候間誌代滯納の方は至急御拂込成相度希上候也

明治三十八年一月　東京淺草區南松山町　統一團

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢　十二冊前金六十五錢　郵券代用は一割增但五厘切手を其とす
一誌讀申込の節は住所姓名を楷書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅八年二月十五日印刷發行

發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木暐學
印刷所　北澤活版所

發行所　東京市淺草區南松山町四十五番地
統一團

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可　毎月一回　十五日）
（明治卅八年二月十五日發行　統一第百十九號）
發行所東京市淺草區南松山町四十五番地　統一團

南條七郎殿御死去の御事、人は生れて死る習ひとは智者も愚者も上下一同知て候へば始めて歎くべし驚くべしとは覺へぬ由我も存じ人にも敎へ候へども時に當て夢か幻か日蓮さへいまだわきまへがたく候、まして母の如何が歎かれ候ふらん、父母にも兄弟にもおくれはてゝいとれしき男に過別れたりしかども子供あまたはしませば必ずなぐさみてこう御座候らんに、いとれしき子の而も男子にてみめかたちも人に勝れ心もかひかひしく見へしかば外の人々もすゝしくこそ見進せ候ひしに、あやなく、つぼめる花の風に萎み滿る月の俄に失ひたるが如くこそおぼすらめ、實とも覺へ候はねば書付たる筆の蹟も不覺候 又々可申候 恐々謹言、

主義

日蓮上人の教義一班

本多日生師講述
侍者日種筆受

第六章　日蓮上人の宇宙觀

第一節　佛敎の宇宙觀の概要

(1)業感緣起　這は小乘敎に說く所にして、此の現象世界の由來は、惑業に依り招感する所なりとす、但し證悟の上には無しと云ふなり

(2)賴耶緣起　賴耶詳かに云へば阿賴耶にして、含藏と譯す、即ち之れ第八識なり、此の第八識中に一切萬物の緣りて生ずべき原因、即ち種子を保存し、其の種子より能く一切萬物を變現生起すと云ふ、之れ唯識論に說く所なり

(3)眞如緣起　眞如とは物にもあらず、心にもあらずして、而かも識心と色質とを含有する所の法性なり、識としては第九識菴摩羅識を立つ、此の第九識に付て起信論と天台と其の說を異にするも、要するに就れも眞如の理体より萬法を生ずと云ふにあり

(4)法界緣起　（一名無盡緣起）這は萬物互に相具すと說もくのにして事理互に融即するのみならず、事々、塵々、法々皆互具互融すと云ふ、即ち現象即實体論なり、華嚴宗の事々無碍法界說、眞言の六大常住說之れなり

佛敎に於ける宇宙觀は、斯くの如く種々に分かれたり、尙ほ前記の外に天台の實相觀、聖祖の實相觀あり、开は節を分ちて述べんとす

第二節　天台の實相觀

天台の法門は互具融即を論ずるが故に、極めて解し難きも、要するに生起次第を明かに意識せば、其の何物たるかを知る事を得ん、彼の非有非無等の融即論は恰も車の廻轉するが如き圓轉論法にして、即ち論理學上尤も忌むべき法式に屬す、迹門十妙中の境妙は即ち天台の宇宙觀なり、これによれば法性の一理を以て根本實在とせり、此の法性の一理は非迷非悟非衆生非佛にして、物心即圓融融即し、得て名狀すべからず而かも緣起上より云へば生起次第して無明ありとす

毘盧の一本（根本的說明）
法性の一理（非迷非悟）
↓佛界
↓無明
菩薩
順理
九界
背理

最初爲本論（中間的說明）

されば壽量品の佛陀も五百塵點の數量の上に於て說き、根本實在を示さず、即ち最初爲本論にして中間的說明なれば佛陀に付ては無始實在を說くを得ず、而して根本的說明は毘盧の

一本を採るが故に、如來ありて此の法性の妙理を悟らずば吾人は到底之れを知るを得ず、止觀には分得果とし全得せずと說明す、即ち凡智は只如來の知見を假り自己の忘想を打破して、觀行即より深信觀成を說くなり、諸法差別の現象界は實相より來る、推功歸本すれば法性の一理なり、此の非佛非衆生の實相の妙理は、例へは海水の全体の如く、波の搖動するは無明の緣起するが如く、波消へ水湛然たる處佛陀の如しとす、故に法性の妙理は理法身となるなり、宇宙の狀態は現象即實在と說けども法性の一理を採るを以て、此の一理即ち圓融三諦は所謂言語道斷心行所滅にして如來稱して妙と云ひ、僅かに止觀に智によりて其の消息を知るに止るも、尙ほ之れ形式のみを傳ふるに過ぎずして到底語るべからざるものなり約言せば

實体的——法性一理實在論
緣起的——無明緣起論

なり、要するに天台の實相觀に於ける實体的說明は、即ち法性の一理なり、之れを本体の靜止的狀態とす

第三節　聖祖の實相觀

聖祖の實相觀は天台のうれとは大に異なり、天台の法性一理の實在論に反して

實体的——十界事常住論

を立て、法性の一理より九界佛界が緣起するにあらずして、九界と佛界とは各無始より自体互に融即し十界俱に實在なりと說かれたり、されば彼の業感緣起と云ひ、唯識所變と云ひ又は眞如緣起、華嚴の事々無碍法界、眞言の六大事常等は、孰れも皆此の十界事常住論の中に包含せらるゝなり、此の具体的九界と佛界との正報あるものが實在せるとは、法華本門に顯はれたる所談にして日蓮上人の特長とし給ふ所なり、されば開目抄に「迹門にては未だ二乘作佛の定まらざると、恰も水中の月を見るが如く、根なし萍の波の上に浮べるが如し」と示されたるは即ち此の意義なり、又內三十四、十法界抄には次の如く示されたり

迹門但是說於始覺十界互具未必明於本覺本有十界互具故所化大衆能化圓佛皆是悉始覺也、若爾者本無今有失何得免乎、當知四敎四佛則成圓佛且迹門所談也、是故不知無始本佛無始無終之義缺不具足又無無始色心常住之義

「無始色身常住之義」とは人格的根本實在なきを云ひ、「本無今有失何得免乎」とは天台の實相觀を破し給へるなり、開目抄に於ける本因本果の論は、顯本を說けるにあらず全く之れ宇宙觀を說かれたるなり

緣起的——佛界緣起

天台は無明緣起論なるも、聖祖は佛界緣起論にして佛界を以て本体とし九界を力用とし給へり、天台は菩薩行の因より佛の果に至るとし、所謂從因至果とするは、經文上より見て至

當なるも、上人は本体力用の關係を以て文底より說明せられたり、即ち本尊抄に我本行菩薩道の文を擧げて佛界所具の九界なりとし即ち九界は佛界の活動なりと說かる、之れ從果向因にして佛の本体を本果と見、その作用として九界を說かれたるものなり

日蓮　本因本果——無始實在
天台　本因本果——最初爲本

天台の說は初番の成道と中間と今日とを分ちて壽量品の釋迦は東方五百塵點の數を以て本因と認め、東西二方の塵點を經たる佛陀は壽量佛よりも古き佛陀なりとし、結局毘盧の一本として法性の一理に歸す、上人は本尊抄に迹門には根本的說明なしとし、「十界久遠之上國土世間既顯」云々と示して、宇宙の當相即ち依報の山川國土等の森羅の萬象は皆悉く十界の材料なりとし給へり其の着眼點は高く天台の上に出て能く天台の缺點を補ひ、完全に天台の議論を發展せられたり、されば宇宙は固より多種あるにあらずして唯一のものなるを、或は神之れを創造せりと云ひ、或は業感より生ずとし、法性の一理なりと論ずれども、要するに法華本門壽量品と上人の說明より外の諸說は皆不用の屬す、開目抄に月の譬あり、开は月の本体未だ現はれざる暗き狀態と、月の光を認めたると溯雲に覆はれたると、全体顯明なるとの差異を擧げらる、即ち佛陀の說明を假らざるときは暗黑にして、無量義は一法より生ずと示されたるとき漸く月光を認め、迹門に至り月体現はれたるも尙ほ薄雲に蔽はれて光幽かなりしが、遂に本門に於て玲瓏たる月の本体を認めたるが如く、宇宙觀に對する他の總ての說明は一の月を多樣に認め畢竟月を蔽へる雲たるに過ぎず、已に本門の明月たる上人の宇宙觀を知らば他の諸說は總て不用に歸せん、而して宇宙觀の結局は全く佛陀觀と一致するなり、迹門の說は法性を本とするが故に佛陀觀とは一致せず、本門の一大圓佛は即ち宇宙觀と一致す、されば開目抄には「九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備つて眞の十界互具百界千如一念三千なるべし」と示されたり、即ち之れ月の本体顯はれたる佛陀の顯本なり

第七章　日蓮上人の佛陀觀

第一節　四敎四種の佛陀觀

四敎四種の佛陀觀は所謂敎理的佛陀觀にして、一の佛陀を四敎各別の見地より認めたるものなれば、恰かも眼鏡の色の違へるが爲め同一の物体を異樣に認むるが如し、故にその本体は唯一の佛陀なり、決して四種の別体あるにあらず、斯く會得せずんば理通じ難し、天台已に之れを謂へり、諸子須らく留意を要す、乃ち四敎四種の佛陀とは

一、藏敎　劣應身　丈六ノ佛（螺髮應身）
二、通敎　勝應身　虛空ノ佛（見ニ相非レト相ニ）
三、別敎　報身　如三淨明鏡現二衆色像無形第一体非

莊嚴而莊嚴

四、圓教　法身　微妙淨法身、具相三十二、一々相好、即是實相、實相法界具足無減

第一は三藏教の佛陀にして、父母の生身轉輪王に勝れ相好纓絡し世間に稀有なる歴史的の佛陀なり、第二は通教の佛にして相、相に非らずと見る、即ち佛陀は具体的のものにあらずして虚空の如きものなりとす、金剛般若經に「相を以て佛を見るは魔の見地なり」と說けるを見て禪宗は、之れを高しと思へるは畢竟この卑き通教の見地より見たる佛陀なり、第三は別教の佛陀にして今日の哲學者は此の見地を出でず、本体の方は鏡の如く老婆も僧も美人も山も川も總てのものその影を映ず、故に之れを「影現の報身」と云ふ、一個体のものにあらず、具体的のものにあらずとし、アラハレと本体とを別に見るなり、天台は之れを別教の見地なりと說けり、第四の圓教の佛は具体的莊嚴法身の佛陀にして而貌圓滿微妙尊特、得て名狀すべからず、如何なる美術の名工も到底此の相好の一だも摸擬するを得ず、一切の美を集極したるもの即ち此の圓佛の三十二相八十種好なり、而して此の圓佛は斯く具体的なれば相對的有限体なるが如く見ゆるも相對的即絶對的、有限体即無限体なり、开は一々の相好は法界の全体を具足して減せざるが故に、今アラハレとしては相對的有限体を現はし給へるも、之れを擴げば山川草木森羅の萬象一も漏さず餘さず具備して無限絶對と合一したる微妙尊特にして誠に言語に絶し一見して菩提心を喚起すべき尊形なり、されば天台は止觀一に發心十種の中に於て第一に佛陀の相好により發心するものを擧げたり、斯の天台の說は上人の御義に契へり

第二節　報應顯本の旨趣

開目抄に曰く「迹門十四品一向に爾前に同ず、本門十四品も涌出壽量の二品を除ては、皆始成を存せり、雙林最後の大般涅槃經四十卷其外の法華前後の諸大乘經一字一句もなく法身の無始無終はとけども、應身報身の顯本はとかれず」と、之れ報應顯本の祖訓なり、彼の諸佛所師所謂法也と說けるものは、即ち法身の無始無終なり、報身は法身より生ずと思へるは、即ち權迹通同の見地なり、此の報應顯本は人格的佛陀の無始實在を顯はせるものにして、眼あり手ありて衆生を救濟し給ふ佛ありと根本的に說明せられたるなり、法界三千の眞理を以て佛陀とするにはあらず、又平等意趣の相對的多くの佛陀は本体の上より顯はれたる應用なり、事法身、理法身は皆平等意趣になるなり、开は開目抄眞言勝劣抄に就て其の意義を會得するを要す

第三節　本迹觀

古來吾宗内に於て本迹を論じたるは管に事理の上のみに止まらず、進んで佛陀觀の上にて論諍せしなり、夫れ涌出壽量の兩品に於ては佛陀の根本實在を說かれ、上人は開目抄下に於て天月水月の干係を以て本迹を解釋せられたり、即ち壽量の佛陀は本の天月にして、他は皆迹の水月なり、此の本迹觀は天台に所謂理事等の六重本迹とは遙に異れり、天台は只法性の實在を說くに止まれど佛陀觀上に於ける本迹觀は初めより人格的報應の實在を說くものなり、斯の本佛が或示己身或示佗身して十界の形を現はし給ふ、故に一心欲見佛とは山川草木等の現象を崇拜するにあらずして、本佛の柔輭の尊形を拜し奉るの謂なり、此の本佛を知らずば不知恩のものなりと、開目抄に指南し給へり、不知恩とは即ち人格的佛陀に對して云へる語なり、若し三千法界を本佛と指すならば、之れを知らざるものは智惠なきもの即ち愚痴のものとこそ云へ、何ぞ不知恩のものと云はんや、毎自の悲願暫くも止まらず柔輭の御姿を以て造次顚沛偏へに吾人を救濟せんとし給へる所の本佛を忘れて、流轉限りなく闇より闇に入るものは豈に不知恩のものにあらずして何ぞ、上人が人格的實在の佛陀を說明せられたる文は開目抄の外至る所に之れ有り、或は「臭き頭を法華經に捧げて金色の如來となる」と說かれ、身延御書には佛が忉利天へ昇らせ給ひけるとき、五天竺の上下萬人悲歎せし樣を「誠に子を失ひ親にをくれたるが如し、いとをしき妻を戀る思の苦すら難忍、何況大覺世尊の三十二相八十種好紫磨金色の粧ひ嚴くして迦陵頻伽の御音を以て、一切衆生を皆佛に成し給はんと御經を說せ給ふ、慈悲深重に御坐す佛の御餘波惜み進する歎き思遣るに、上陽人之上陽宮に囚籠られて歎し歎にも勝れ、堯王の娘娥皇女英の二人舜王に別奉て歎し歎にも勝れ、蘇武が胡國に流されて十九年雪中に住けん思にも勝れたり」と記されたるは咸皆懷戀慕一心欲見佛の意と見るべきなり、即ち親子の情愛、男女の戀愛の内に至誠の顯はるゝあり、斯くの如き意義により佛陀を慕へる樣を表はし給へり、若し本佛の姿が山川草木の如き宇宙の當体其の儘を指せるものならんには、何ぞ斯くの如き温情顯はるゝとあらんや、或は又「如來衣を以て覆ひ給ふ」との聖訓の如きは之れ決して松柏の如き宇宙の現象を指して如來と見たるにあらざるとを證するに足らん、然るを世人が却て人格的佛陀を卑しと思惟するは、全く別教の見地を出でざるもの、豈に之れ憫むべきにあらずや、要するに人格的の本佛は事体融即の理を根本として眞を盡くし、道德に於ては善を盡し、三十二相八十種好の相好は義を盡くせる有相の尊形にして、無始實在の淨法身なり、吾人は須らく斯の人格の佛陀を以て信仰の對象と仰がざるべからざるなり、尙ほ眞宗及び眞言宗の佛陀觀を紹介し、併せて其の誤謬を指摘せんと欲するも、時間に餘裕なきが故に之れを略す（筆者曰く、本章を讀むと同時に、宜しく統一觀百十三頁の「妙法蓮華經體用觀」（九頁以下）に於ける本佛觀とを參照さるべし）

第八章　結論

輓近世界の哲學者宗教學者の學說駸々として進歩せる中にも

獨逸の學者「ハルトマン」氏の宗教論は最も公平の見地に立ちて佛耶兩教を批判せり、并は佛教は地盤堅固なるも家屋の構造成立せず、基督教は屋蓋あり家屋あるも其の地盤薄固ならざる爲め動搖を免れずと、而して今を我が日蓮上人の教義は已に遠日講述せるが如く其の地盤堅固にして家屋の構成又完備し、「ハルトマン」の所謂佛耶兩教の短を補ひ長を採りたる實に完全無缺のものたり、されば「ハルトマン」をして一たび上人の教義を研究せしめたらんには、思ふに彼は非常の歎を以て之れを迎へんと必せり、抑も上人の人生觀は厭世觀に傾かず著世の失に漏れずして、能く現世の上に眞正なる人生觀を教へて幸福的生活を得せしめ、尚ほ進んで菩薩の道を成せしめ給ふ、斯くる信後の生活を世人に領得せしめば其の利益頗る鴻大ならむ、又由來宗教家は狹劣偏固に陷り易きも、之れを照すに、上人の開顯主義の光明を以てせば、必らずや大に啓發誘掖するとを得ん、又上人の國家觀は因緣の解釋を施し、日本に生れたるものは日本の國家觀を得、又之れを他邦に應用するに毫も支障なきものにして、就中身伏の說明に至りては東西古今の宗教家が最も惱める難問題ゞ容易く一刀兩斷に解決を與へられたるを見るべく又正しき行動、仁慈博愛は大道德大宗教なるが、之れを綱めて正法と云へる意義を發揮し、又日本の國家を中心として世界に光明を發揮せんとし給へる誠に上人の識見抱負の偉大なると、今後大陸的國民たるべき吾國民を啓發するに餘りあり、之を要するに上人の教義の解釋は何れの點に於ても卓絕靈妙を極めたりと謂ふべし、只憾むらくは講習會の期間短かく僅かに十日而かも十五時以内の時間に於て、斯く總ての大問題を講述せんとするは、固より至難の事にて一々詳密なる說明を悉くす能はざりき、然りと雖ども上人の教義を研究するの方式は已に指導し置きたれば、諸子宜しく自から今後研鑽の功を積み、此の一斑を基として能く全豹を討尋せよ、至囑至望（完結）

日蓮上人の宗義及系統

本多日生講述
古定賢正筆受

第四節　日蓮上人の積極的統一主義の主張

予は是より進んで日蓮上人の積極的統一主義の意見を述べんと思ふ從來述べ來りたる統一主義が吾日蓮上人の主張にかゝる統一主義と相對比して如何に差異あるやを見るべき也教行人理の四一開會といふことあり是は法華經の統一主義の歸着にして教とは一代の說教を開會し行とは一代の修行法を開會し人とは一代の對告衆を開會し理とは一代の教理を開會す此四一開會の理想は誠に立派なる思想にして總て一切經を法華經にて開會し而して法華經の資格を高めたる也而も迹門の四一開會はいまだ眞の開會にあらず本門の四一開會のみ獨り一代經に獨歩す迹門の價値は唯實相論を顯現したるまでにして本門の價値は其以上に出で佛陀論の上に於て優に見るべきものあり此本門の佛陀論あらはれざれば迹門の實相論も有名無實となり本無今有の失永く脫るゝあたはず本門の佛陀論は佛教に於ける宇宙觀も人身觀も一切の重要なる項目を含めり日蓮上人の積極的統一主義の意見は實に此に根ざして起り來りし也

抑も本門の佛陀とは如何といふに本門の佛陀は實に体用不二の佛陀なる也壽量品に說て曰く如來秘密神通之力といふ秘密とは体の三身也神通の力は用の三身也而して体も用も不二也俱体俱用也佛とは此体用不二の當相を指すものにして用を以て論ずれば千種の佛出て体を以て論ずれば一釋迦牟尼佛の本体に歸す本佛は月の体也迹佛は月の影なり此本佛の每自の悲願よりして口輪の說法あり感應利益は此口輪說法より來る也本佛の慈悲善根力より一切の利益感應を生ず佛教に人身觀を說く所以のものも其實果は此本佛との內面的關係をとらざれば何等の趣味なし即ち佛陀と人身との關係を說くのが人身觀の最後の結論なり所詮壽量品に入らざれば眞の積極的統一主義はあらはれざる也近來の佛教研究者は中心なし其故其說淺薄にしてとるに足らず佛教統一の中心は壽量品の佛陀觀に入りて始めて定まれる也姉崎氏は現身佛と法身佛とを分けて見たれども是は大に非也恰も天台宗以前の教義に似たり現身佛と法身佛との關係が既に先天的に成立しあることを知らざるなり是豈大いなる欠點にあらずや人が壽量品の佛陀觀を仔細に味はへば壽量品の佛陀は實在の顯現法身のあらはれにして即ち本覺の佛陀と始覺の佛陀とは一致せるものなりと說く也故に歷史的釋尊が直に法身の釋尊にして相對身の當相其まゝが直ちに絕待身なり壽量品に釋尊自ら宣はく天人及阿修羅皆已今釋迦牟尼佛出釋氏宮去伽耶城不遠坐於道場得阿耨多羅三藐三菩提然善男子我實成佛以來無量千萬億那由他阿僧祇劫なりといひ給ひたりこれは釋尊自らが顯本せられしものにして天人及阿修羅とは即ち三善道にして彌勒等の菩薩を三善道に攝し惑者となす也歷史上の釋尊の上に尙法身の佛あるといふは非也歷史上の佛が直ちに久遠の佛陀なる也三十成道の佛は直ちに本覺の佛なる也迹因迹果の佛に即して本因本果を顯す也釋氏より出でたる釋迦は實に本尊の本体也釋迦の名を以て本佛觀を立つるが佛教上正當の事に屬す日蓮上人の積極的統一主義の意見は實に釋迦本佛論より來りし也

實相論の方面に於て統一的主張を見れば即ち法体唯一論なり無量義經に曰く無量義は一法より生ず此語實に法体唯一論の證據なり一法とは實相なり單に實相といふも權大乘諸家のいふ處と同じからず無量義經に文字雖一其義各異といふ即ち法華經の實相は他の權大乘諸家の實相とは永く異なる也法華經の方便品にて此の實相をとく而してはろげに佛陀をとく開

目抄に月の体のいまだ見るずして光りほの見ゆるが如しといふものこれなり方便品にて十如是を說きたりしが此の現象と實体とを說きたりしなり天台が此十如是を基本として一念三千論を組織するや佛敎に於ける總ての緣起論は悉とく此中に入る因と果との中には業感緣起論入り因緣果の中には賴耶緣起入るなり阿賴耶識は大我にして差別の我は小我也此小我は大我に入る小我は生滅すれども大我は不滅なり其他眞如緣起も法界緣起も六大緣起も皆共に此中に入るなり十如是論の內容は廣大無邊なり

迹門は空間的說明は滿足してあれども時間的說明に大なる欠點あり迹門にては萬有の無始實在あらはれたれども未だ本佛の無始實在現れず佛の實在が現はるゝは壽量品にして此の壽量品なくんば天に日月の人に魂ひの山河に珠のなからんか如しと批判せられたるもの即ちこれが爲めなり而も迹門の萬有の實在も此本佛の無始實在あらはれて始めて完成を告ぐ即ち空間的說明は時間的說明をまちて始めて完成せし也彼迹門の說明は無明緣起にして本門の說明は佛界緣起也佛界緣起を表として總てを論せざれば悟の知見を以て世界人生を照すこと能はざるなり開日抄に此壽量品を知らざれば蓍生に同じといひしもの果して何の意ぞや蓍生といふことを道德的に解釋すれば父母を知らずといふことなり壽量品の佛陀を知らざるものは其意父母を知らざるにあたるなり壽量品の本佛は如何に尊くあるかを見るべき也

此壽量品の本佛を法華經には如何に讚歎し奉りあるゞといふに提婆品には深達罪福相遍照於十方微妙淨法身具相三十二以八十種好用莊嚴法身と說くこは八才の龍女が讚佛偈なり深達罪福相遍照於十方とは佛の內證を讚め以下の文字は佛の外相をとく此微妙淨法身の姿が常住實在なりといふ即ち相對身が絕待身なりといふ外の經々にては法身と應身とを隔歷してとけども法華にては然らず有限性の佛陀其ものが直ちに無限性の佛陀ととく有陀無限を隔てゝ見るは大なる誤解也是畢竟相々實相絕待不二の妙旨を知らざるに依る故なり三十二相の相對身に宇宙的見解の絕待身をとく人格身を捨てずして絕待身をとく三十二相の釋迦を中心として絕待をとく也是日蓮上人の釋迦中心論の骨子也

また無量義經に曰く

大哉大悟大聖主　無垢無染無所著
非有非無非因緣　非自非他非出沒
非生滅示爲丈六紫金暉

即ち初めは佛の絕待性をとくこれは吾々が認めて是非すべき限にあらず此絕待性は露出して丈六紫金の佛身を成す傳敎大師の注無量義經にいはく四八の相に約して內證の身を顯し丈六紫金の相を示すと即ち紫金法身の体を歎ず紫金法身とは三十二相の人格性をとく人格有限の佛の外に宇宙身をとるに

あらず美的法身紫金法身をとる也

法華經の結經たる觀普賢經に釋迦牟尼を毘盧舍那遍一切處と名くといへり釋迦牟尼とは應身を指す舍那とは法身也即ち梵漢並稱也是相對身劣應身人格身歷史身に絕待身勝應身神格身超歷史身を引つくるなり各宗では絕待身から相對身があらはれてくる樣に說けども吾日蓮上人は然らず相對に即して絕待をとき人格に即して神格をとく也開目抄にいはく

始成正覺の釋尊十劫已前の諸佛を集めて分身ととかる流石に平等意趣にも似ずれびたゝしくれとろかしぬ

と是四十餘年の釋尊が一切十劫已前の佛を集めて分身といふ是人格的佛陀か絕待身を開顯したる也報身の彌陀も法身の大日も皆應身の釋尊より流出せし也平等意趣にも似ずとは法身平等論に歸せず飽迄も釋尊一体を中心としてとくなり魏々堂々として法華經は釋迦中心論をとく敢て部分的意趣にとくにあらず即ち一代經の生命なりとしてとく也時間空間を透ふして釋迦中心を說ひて三世十方の佛陀を統一す平等意趣にも似ずしてとは上人の積極的統一主義を見るべからずや

日蓮上人の佛陀觀は徹頭徹尾伽耶の佛陀を中心として本佛觀を成立せし也其故虛空身及び理法身を排斥す法華眞言勝劣抄にいはく諸大乘經に破せざる伽耶始成是を破りたる五百塵點也と諸大乘經では眞如をとき彌陀をとき大日をとき有始有終八十生滅の佛しか見えざりしなり故に釋尊以上に高き佛を今顯したるなり伽耶の佛を無常の佛生滅の佛相對の佛小佛劣佛と見つゝありしを破ぶつて久遠の佛常住の佛絕待の佛最尊無上の佛となしたる也釋尊に附隨したる小なる思想を打破つて大なる思想をとき顯したる也是日蓮上人の意見也開目抄に諸大乘經には法身の無始無終はとけども應身報身の顯本はとかれずといひしもの即ち是也日蓮上人の積極的統一意見は畢竟此本佛觀より來りし也

講演

日什聖人置文諷誦抄卷上

講師、齡八十老比丘　阪本日桓講演
增田聖道速記

此曼荼羅、惣ノ雖レ一ニ所三會之說相一別ノ專ノ顯ニ虛空一會ノ儀式一文　此の三句廿三字は分て二つ初の一句四字は上の文を牒し二に總雖より去ての二句十九字は釋す此の釋の文に又た分て二つ初の惣雖の下一句十字は惣を示し二に別專の下一句九字は別を示す偖此の三句廿三字の大意は上の諷誦章の文に列る所の法寶の布施の功德を明す中の本化在座の本門の本尊の實義を顯したる文で有ます其所で此の曼荼羅は惣して二所三會の所說の法華經全部へ亘る所以は此

の曼荼羅の中に書き列ねたる舍利弗目連大梵帝釋日月明星四衆八部の人々は皆序品の說法の時に來集し列坐したる人々で有ます又た文殊普賢等の迹化の菩薩の列座も有ます文殊師利菩薩は序品の會座に在て彌勒菩薩と賓主となり問答したる菩薩で有ます又た普賢菩薩は釋尊法華經を八ヶ年の間に說き給へたる第八ヶ年の經の末會に來りて釋尊に再演の法華經を請願して勸發品を說き給ふを聽聞したる菩薩で有ます如ㇾ是等の人々が今此の大曼荼羅の中に書き列ねて有ますから總て二所三會の說相に亘ると御書きになつたで有ます然どいへども此の大曼荼羅は本化の大菩薩方の在座遊されたる本門の本尊で有ますから序品の說法の時は未だ開迹顯本の法華經を說さる已前の經にして躰外の無得道の迹門で有ます且又勸發品も還迹流通の說相にして躰外無得道の迹門を流通したる勸發品なれば此等の經文を採用て二所三會の說相に亘ると申すでは有ません其所で開迹顯本の法華經を御說きに成りたる上は躰外無得道の迹門の法華經も本門躰内の有得道の迹門と成ますから本迹ともに本有常住の有得道の御經と成ます此の開迹顯本一部唯本門の法華經躰内の本迹に約して總じて二所三會の說相に亘ると御書に成つたで有ます決して躰外無得道の迹門や還迹流通の經を採て二所三會の說相に亘ると申すでは有ません學生達本宗の宗義に注意成されよ別專顯二虛空一會儀式一 文 此の一句九字は別して本門の本尊を示したる文なれども此の別の中に更に總と別との二の法門を立てねば上行在座の本門の本尊の實義が顯れませんから辯じて聽せます別の中の總と申すは唯虛空會と申しますれば法華經迹門の見寶塔品より去て法華經本門の如來神力品までの十一品の御經が虛空會上にて御說に成たで有ますから總じて取ば迹門の見寶塔品より去て本門の如來神力品までの十一品を取て虛空一會之儀式を顯すと申すで有ます是れは別の中の總の法門で有ます是より別の中の別の法門を辯じて聽せます是れは本化在座の本尊に約して論ずる法門で有ます上行菩薩等の本化の大士が虛空會に列座しまするは法華經本門の從地涌出品より去て如來神力品までゝ有ます囑累品に於ては釋尊は塔を出て本との靈山に御皈になり上行等の本化の大菩薩方は各々寂光の本國土に御皈になり七寶塔の扉は本との如く閉て靈山も殆ど火の消たやうで寂寞成ました依ては虛空會上に於て別して上行在座の本門の本尊に約して論ずれば別して從地涌出品より去て如來神力品までの七品を採て別しては專ら虛空一會の儀式を顯すと御書に成たので有ます是れが別の中の別の法門と申ので有ます却說總じて採る虛空會の寶塔品には證前の寶塔と起後の寶塔と申す二種の寶塔が有ます其證前の寶塔と申すは多寶如來が法華經迹門の開權顯實の妙法を皆是眞實と證明したるを證前の寶塔と申します又た起後の寶塔と申すは本佛の釋尊が後に說せ給ふ開迹顯本の法華經を多寶如來が皆是眞

實と證明したるを起後の寶塔と申します其所で迹門の妙法も同く共に眞實の妙法なれば眞實の妙法が二つ有て爭が起て治らさる事は國に二王有て天下の治らざると同一般の事で有ると學生達は疑が有ませうが是には大に仔細が有ります權實相待しますれば證前の寶塔の迹門の妙法も眞實と申されます去ながら本迹相待しまする時は獨り起後の寶塔の本門の妙法が眞實の中の眞實の妙法で有ます其所で證前の寶塔の迹門の妙法を多寶如來が皆是眞實と證明致しました所以は釋尊が華嚴阿含方等般若の諸經を四十二年の間說きたる敎ゑを無量義經と申す法華の序分の經に於て四十餘年未顯眞實と打破り法華經方便品の正宗分に於て世尊法久後要當說眞實と靈山の假裁判所に於て釋尊が權實相待して四十餘年の被告の敎は權敎にして未顯眞實なり原告の法華經は實敎にして要當說眞實なりと假裁判をなしたるを多寶如來が立會判官として妙法蓮華經皆是眞實と宣告したる者で有ます○次に起後の寶塔の本門の妙法を多寶如來が妙法蓮華經皆是眞實と證明したる所以は本佛法皇の釋尊靈山の虛空會と申す大審院の法廷に於て十方分身の諸佛の裁判官稻麻竹葦の如く來集し立會たる際今日の始成正覺の迹門の佛の所說の敎法及び爾前四十餘年の迹佛所說の敎法並に三世十方の迹佛所說の被告の敎法に對して如來誠諦の語を以て開迹顯本の法華經の原告の敎を說て權迹實本の曲直を判決し本迹二門の成敗を糺明して遂に權迹の諸乘をして實本の一佛乘に歸せしめ統一の判決を成し給へたるとき十方分身の諸佛は舌相を大梵天に付け眞實が中の眞實なりと證誠し多寶如來は大音聲を以て徧く四衆に宣告して妙法蓮華經皆是眞實と證明したるで有ます是が起後の寶塔の開迹顯本の法華經本佛の釋尊終窮究竟の極說にして多寶如來の眞實本懷の證明で有ます老比丘は裁判の事は辯へませんが學生達が得心し易きやうにとて事を裁判に托して聽せたので有ます此の起後の寶塔に就ては妙樂大師と申す御方が法華文句の記と云ふ書物に四巻ノ末四十五丁講述して有ます今取意して辯じて聽せます云く多寶如來の寶塔の涌現したるは開迹顯本の法華經を說く爲の遠き緣由である上行等の本化の大士の涌出したるは開迹顯本の法華經を說く近き緣由で有ると釋して有ます又た吾宗祖大聖人の御撰述の法華取要抄と云ふ書物に錄内九ノ巻十二丁此の起後の寶塔の講述が有ます是も取意して聽せませう云く本佛の釋尊既に多寶如來の七寶の塔の中に入らせられ二佛左右に座を並べ十方分身の諸佛を集め來らしめ上行等の本化の大士を召出して開迹顯本の法華經壽量品所顯の事の一念三千神力品の結要の妙法蓮華經の五字の題目を取て末法の一切衆生の爲めに授與し給ひたるが當時一會の大衆一人たりとも彼れ是れと異議を申したる者なし是れは之れ本師の本法を本化の弟子に附囑し本化の弟子が之を弘むるは正道正理なるものなれば一同承伏したる者で有ます已上取意此等の正確の文に依憑

して吾開祖大聖人が起後眞實の寶塔に約して　專顯二虛空一會儀式一御書になつて愈じて遠く迹門の寶塔品より取りて本門の本尊の出現する遠由を御說きに成たで有ます是れは之れ別の中の總の法門で有ます是よりは別の中の別の法門を辨じて聽せませう偖本宗所尊の大曼荼羅には本化の大士上行無邊行淨行安立行の四大菩薩を勸請して有ます此の尊貴なる四大菩薩の法華經の會座に列りて聽聞したる法華經は本門の從地涌出品如來壽量品分別功德品隨喜功德品法師功德品常不輕品如來神力品已上此の七品の御說法の時に在座聽聞して前の迹門十四品の御說法の砌にも來り給はず後の本門の囑累品の時は座を起て寂光の本國土に御歸りに成りたる未見今見の大菩薩で有ます故に吾宗祖大聖人の御撰述の觀心本尊抄に云く此の本化の上行等の大菩薩は最初の寂滅道場の華嚴所說の會座にも來らず本師釋尊の入滅の砌にも訪吊せず又た迹門十四品所說の時にも涌出せず唯た本門七品の間に在座し聽聞して囑累品に座を起て下方の寂光の本土に歸らせたる尊貴の大菩薩で有ます已上　取意然れは　則本化在座の十界勸請の大曼荼羅は別しては第十五番目の從地涌出品より第廿一番目の如來神力品までの七品を取て別專顯二虛空一會儀式一と御書に成つたで有ます是れは之れ別の中の別の法門で有ます此の佛在世の時の本化在座の十界羅列本門七品虛空會の儀式を吾宗祖大聖人佛勅を蒙り末法に出現して佐渡國に於て始て書き顯はしたるで有ます最初は文永十年大歲癸酉四月二十五日に如來滅後後五百歲始觀心本尊抄と申す御書を御撰述になりまして此の御書の中に本化在座の十界圓滿具足の本門の本尊を御書に成て有ます其翌日廿六日に至り本尊抄送狀三卷外を御認になつて富木殿へ御授與に成りまして其後同年の七月八日に佐渡の國に於て此の本尊抄より別行書寫して御授與になりうれより今日に至る迄佛壇に安置し奉り常恒不斷尊信したるので有ます此の本尊の脇書に佛滅度後二千二百二十餘年之間一閻浮提之內未曾有之大曼荼羅也と有ます然れば則七月八日よりは已曾有の大曼荼羅で有ます本尊抄送狀には佛滅度後二千二百二十餘年未レ有二此書心一と有ます此書と申すは本化在座の十界勸請の大曼荼羅のことなれども末た一幅の本尊に別行書寫し給はざる已前なれば本尊とは仰せられずして此書と御書に爲つたで有ます吾宗祖大聖人か御法難にて佐度國左遷已前は題目一遍を書寫して本尊となし或は法華經一部を安置して本尊とし或は釋尊を本尊として法華經を御弘通遊はされたで有ます佐渡國左遷より後眞實の法門と眞實の本尊を顯し給ひたで有ます依て宗祖大聖人の仰に日蓮が佐渡へ法難にて左遷せざる已前の所弘の法門は佛の爾前經の如し取意爾前經と申すは本佛の釋尊開迹顯本の眞實究竟の法華經を說かざる爾前の經と申す事にて天台傳敎大師の弘めたる法華經迹門の經を佛の爾前經の如しと仰せられたで有ます此時は我宗

祖も我師天台我師傳敎とて尊信致しました爾前經と申しても念佛眞言禪律等の所依の權敎の事では有ません學生遠注意して御妙判を拜讀なされよ○序でに二所三會と申す事を辨じて聽せませう二所と申すは靈山會と虛空會との此の二ヶ所で有ます此の二ヶ所にて法華經一部八ヶ年間に御說になつたで有ます○次に三會と申すは最初の第一會は靈山に於て法華經の序品方便品譬喩品信解品藥草喩品授記品化城喩品五百弟子品人記品法師品已上此の十品の御經を御說になつたが第一會で有ます○第二會は虛空會と申します此の會に於ては寶塔品提婆品勸持品安樂行品涌出品壽量品分別功德品隨喜功德品法師功德品常不輕品神力品已上此の十一品の御經を御說になつたので有ます○第三會は虛空會の說法が畢て再び本の靈山へ御還になつて囑累品藥王品妙音品普門品陀羅尼品妙莊嚴王品普賢品已上此の七品の御經を御說になつたで有ます是れを三會と申すで有ます○雖レ旦二說相一　文　說と申すは所說の法華經の事で相とは法相の事にて此の曼荼羅は愈じて言ふときは二所三會に說き給ふ所の法華經一部に亘る曼荼羅なりと云ふ義で有ます此の所で多寶塔中虛空會の事や多寶如來の寶塔出現の事抔委しく辨じて聽せたく思ひまするが長々しき法門の事ゆへ他日別に辨じて聽せませう

法話

慧光照無量

紅蓮白蓮生

○慧光照無量とは久遠實成の釋迦牟尼佛の知慧の光を讃歎したる語で御座ります私くしども平生此お經文を讀みます度毎に如何に佛樣の尊いといふことが判り限りなき悅びに入ることが出來るのであります

○今の世の中は佛樣の知慧に餘り遠ざかつて居るのではありますまいかまた佛樣の光明に餘り近附て居ないのではありますまいか私くしは一念今の社會を深く考へますときはどうもかやうな考が起きてなりません然りこれがおきるのが當りませんでは

○慧光照すこと無量なりとは眞に吾等の爲には好き慰めのみ言葉ではありますまいか今の世の中は皆闇いのであるいくら學者が澤山に出來てもいくら道德家が澤山に居りましても世の中の有樣は益々怪しい狀態になりゆきはしないのですか總ての美しさはまばゆい樣でありますがうしてうれが文明だといひますけれど餘りにうれが皮相ばかり裝飾ではありますまいか

○一体文明とは何の意味でありませう御用商人が政府へ運動

してお金をもうける事でせうか自稱詩人が怪しい素人芝居をすることでせうか女學生が澤山に出來まして女子のふむべき道に變化を與へることで御座いませうか實業上の文明は漸次發達しまして店風の實業は商館風の實業となりました亦道德上の事にしても舊道德がすたれまして新道德即ち積極的自我發展主義の道德が盛んになりましたりして世の中は文明になりましたといふのであります

○然り今の世の中は文明であるといふ之を一寸宗教の上で見ましても寺院的宗教は漸次其勢力が衰へまして教會的宗教が其勢力を張つて來ましたのは何の爲で御座いませう是は宗教が漸次其舊基礎を打こはして新しい基礎の上に其勢力を張らんとするものではあるまいか

○是からの宗教は寺院的宗教は衰亡もしませう亦教會的宗教が發達もしませう然し然し實際の其宗教の感化が行屆くかどうか宗教は理屈ではないそんな形式の事はどうでもよいとして實際の感化が必要なのである

○實際の感化とは何であるか佛の智慧の光を遺憾なき程度に發揮しなければならぬ是世の中の闇黑を救ふ所以である今の世の中はすべてに於て闇いのである此を救ふは佛の智慧の光でなくてはならぬ

○闇きより闇きに迷ふものをして悉く佛陀の慧光に照さしめなければならぬうしなければ世の中は日一日に闇黑に掩はれるのである

○あゝ佛陀の慧光是實に今の社會に一日もなくてならないものである

家庭

家庭に於ける女子の位置

古定賢正

○家庭記者が毎々申すことで御座いますけれど家庭の趣味は女性に依て持つて居ります女性は何故に家庭に於て趣味の原動力となつて居りますか其原因はいろ〳〵ありませうが女性は概してやさしい趣味を持つて居るからであります

○やさしいといふことは慰藉である男性は恰度新聞の二面若くは一面の記事の樣で硬派であるが女性は即ち三面の記事の樣で軟派である軟派の趣味はどうしても新聞になければ新聞がごつごつして居ると同じく女性の趣味が家庭になければどうしても家庭がごつ〳〵していけない吾人はかゝる意義に於て家庭に女性を必要とするのである

○かくまで必要にして缺くべからざる女性であるから其人格の高尚な女性が家庭に入しいてのある女性の人格の高尚なのは丸で神樣の樣に思ふ時かある亦菩薩の樣に思ふ時がある

○女性を神樣だといひ亦菩薩だと思ふなんていふことを一寸聞きますとフゝンとお笑ひなさる人もあるでせうけれど決し

てこれが私くしの空想ではありません事實女性は一面に神樣の樣に亦菩薩の樣にならなければならないのであります

○世には嫉妬深き女性ばかりを見て居る人は嫉妬か女性の持前であるやうに否嫉妬といふことがあるのがむしろ女性の先天の要素であるかの如く思ふて居る人もありませうこれは大變な心得違いではありませんか嫉妬は女の持前では斷じてありません、そこでこんな女性計りを見て居る人は菩薩の樣な女性神樣の樣な女性はとても意識せられないのであります

○今の女性の人格ほど下鄙て居るものはありません分けて東京の女性は其風采が野鄙ては御座いませんか誰やらが西京の女性を奥樣に譬へ亦東京の女性を妾に譬へましたが誠に適當な評だと思ひます私くしは慈處で西京の女性が奥樣であるといふ評につひての是非は暫くいひますまい唯東京の女性が妾のやうであるといふことは眞に一の警語として聞くよりもむしろよく東京女性の短所を穿つたものとしてきくのであります

○既に箇樣なことであるから東京の女性は其人格に附着して居る美が何だかう完全の美でないと思はれる優美とか秀美とか崇美とかいふものは絶へてありませんで唯眼につくものは怪美とかいふやうなだらしのない美であります、うういふ美はとても女性の完全した意義の美ではありません女性の美は外觀の美も必要でありますが第一が内在的美がほしいのであります形は誰れにでも判りますが内在的美は誰れにでも判りません然し若し一般の女性が賢女であり淑女であれば形の美を表現します前に先第一に心の美を表現します心の美を表現しますのは一寸むづかしいのでありますが其心にうつくしい美がみち〳〵てありますれば何か形をかつて現れて來ますれは手の動し方、障子の明け閉て、起居振舞、亦は他人に物の言ひ樣子供に對する態度、夫に對する場合、父母に對する場合にいろ〳〵の時と場合に遺憾なく現れるのであります

○見よ今の女性は高いといへば其高襟的なのであらう亦深いといへば英學の素養が深くていらしやることであらふこんな人格は餘りほしくない彼女の心をしてやはらかく、やさしくしとやかにさせたいうしてそういふ人格を家庭にあらしめたい家庭はかやうな女性に依て其高尚な風が維持することが出來るのである

○家庭は誰れにでも判りますが内在的美は誰れにでも判りません然し若し一般の女性が賢女であり淑女であれば形の美を表現します前に先第一に心の美を表現します心の美を表現しますのは一寸むづかしいのでありますが其心にうつくしい美がみち〳〵てありますれば何か形をかつて現れて來ますれは手の動し方、障子の明け閉て、起居振舞、亦は他人に物の言ひ樣子供に對する態度、夫に對する場合、父母に對する場合にいろ〳〵の時と場合に遺憾なく現れるのであります

○かやうな心の美がある人はやがて其女性は神樣に近い亦菩薩に近い私くしは敢て近いといふれは何であるかまだ其人は直に神ではない菩薩ではないからである

○願くは女性の人格をして神樣の樣に高くしたい亦菩薩の樣に慈愛の心深くあらしめたい

○見よ今の女性は高いといへば其高襟的なのであらう亦深いといへば英學の素養が深くていらしやることであらふこんな人格は餘りほしくない彼女の心をしてやはらかく、やさしくしとやかにさせたいうしてそういふ人格を家庭にあらしめたい家庭はかやうな女性に依て其高尚な風が維持することが出來るのである

○家庭に於きまして尤も重要の位置を有するものは生活であります生活といふことを單に食ふことに呑むことゝに考へておりますものは畢竟生活の意義を解しない人でともに家庭のことを論ずるに足りない家庭といふことを若食ふことゝ呑むことと心得で居る樣なものは家庭夫自身をして極めて無意義ならしめるものである

○家庭は總ての生活を全ふする爲め設けられたものである總ての生活とは何であるが人が人として完全に生活する總ての生活狀態が即ちうれである家庭に於ては人は總ての生活を責任を帶びてなさなければならぬ

○總ての生活狀態にて經濟的生活もある亦道德的生活もある又交際的生活もある數へ來ればあまたあるけれども今其を擧くるの遑かない

○然し世の多くの人が是等總ての生活を責任を帶てなしつゝあるものがある、か人は一日も經濟的生活を離るゝことは出來ないが總ての人は此經濟的生活を責任を帶びてなしつゝあるのがあるか道德的生活と交際的生活とに時々欠點が暴露するのは此經濟的生活か責任を以て完全に行はれて居ない證據ではあるまいか人はよく交際的生活をする併しこれが持續してゆくか頗る怪しいのである

○此交際的生活が永く持續してゆかないのは是一方の道德的生活とが完全に行はれないからである否少しは行はれて居るにしてもそれが責任を帶びて行はれていないからである

○道德的生活にした處がいつも社會から非難ある人は完全な道德的生活をして居らぬ人である若し總ての人が完全に責任を帶びて道德的生活を全ふしたならば其人にはさまで非難が起らぬ筈である然るに今の世の上流の人々に比較的に非難の聲が時として起るのは其人が道德的生活を責任を帶びてなして居ないからである責任ある道德的生活是實に今の社會に尤も必要とする生活ではあるまいか

○經濟的生活を全ふする爲に人は往々にして道德的生活を犧牲にする時がある是由々しき大事である特にうれが普通一樣の經濟的生活を全ふする時でなく即ちやゝ膨脹せんとする場合の經濟的生活は必ず道德的生活を犧牲とするうれも普通一樣の道德的生活にあらずして情理並至りたる高等な道德的生活を犧牲とする

○あゝ是黃金崇拜の風が今や社會の總てを吹きまくつて居る其故ではあるまいか如何に經濟的生活が貴重なとはいへ情理並び至る高等な道德的生活を犧牲とするに到つては是實に人道問題である責任ある經濟的生活とはいへないうこでうれが其人の道德的生活に非難の起る元である

○經濟的生活の眞意義は正當の利得をとる是經濟的生活の眞意義ではあるまいか道德的生活とは何であるか即ち情理の生活である人は情理の動物である上からは即ち情理の生活をし

なければならぬ經濟的生活が時として此道德的生活を犧牲とするならば即ち情理を犧牲にするものである人はこれを稱して文明だといふ

○生活の總てをして責任ある生活たらしめよ是家庭平和の根元である吾人はどうしても家庭の平和を求めなければならぬ

家庭論（其一）

○家庭は人生に於ける樂園の最大なるもの也、見よ終日かけ歩るく世の中は其かけ廻る人の爲には殆んど砂漠の中にも似たらずや、馬車、荷車、人力車、砂を蹴立てゝ疾走し而して我れ亦此等車を追ふて疾走する一人にあらずや、吾人は何故に此砂と塵とにまみれて走らざる可らざるか嗚呼世は一の大いなる砂漠也、而して此砂漠に一の綠林あり吾人の家庭は即ちそれ也

○家庭の樂を享受することを得るものは幸ひなる哉、其人はやがて砂漠の中に於て綠林を得たる人と同じければ也、而も退て思ふに此家庭の樂を享受し得るものは今の紳士紳商の間にあらずして多くは中派以下の徒にあり、一は家庭の樂を見ること兒戲と均しく、一は家庭を人生の樂園として樂む社會を見るに高き見地を以てし金力權力を以てするものは家庭以上の樂地を求めんとする也此に反して世の中を營々役々として暮すものは家庭を城廓として立籠り、微かなる滿足に醉ふ、然しながら家庭を樂むこと能はざるものは是未だ人生を樂むこと能はざる也

○家庭には愛なかるべからず、愛は慰藉也、愛と慰藉とは女性に依るべし、女性なき家庭は愛なき家庭也、慰藉なき家庭也

○東京の家庭は趣味餘りに雜粗也、家庭は今少しく濃厚なる趣味を要す、濃厚はひつこさを意味するものにあらず、唯情味の掬すべきあれば足れり

○朝の家庭は希望の家庭也、晝の家庭は忙しき家庭也、夜の家庭は樂しき家庭也、夜の家庭を外處にして他の處をうろつくは到底家庭を解する能はざるもの也、吾人は夜の家庭を愛す

○男子のみの家庭は何となく荒々しく亦騷々しきもの也、女子のみの家庭は餘りに弱々しく亦靜かさに堪へざるべし、靜中動を得ざれば家庭の趣味を生ずる能はず、是女子に男子の必要なる所以也動中靜を得ざれば亦家庭の趣味を生ずること能はず、是男子に女子の必要なる所以也、動の趣味は騷々しけれども勇ましく、靜の趣味はさびしけれども、しとやか也

○家庭には樂器あるを要す、氣のくさ〳〵したる時將亦何となく物思に沈む時、其樂器あれば以て洋々の音に心耳を澄ます可し、樂は人を靜かさに誘ひ、亦た高さに誘ふ、人の氣品を養ふもの樂を措いて他にあらず、家庭には樂器なかる可らず

○家庭には一の調和なかる可らず、調和なき家庭は殺伐なる

家庭也、若し夫と妻とか其意思を異にして一は東の方へ往かんといひ、一は西の方へ行かんといはゞ是明白なる衝突にあらずや、調和なきとは是也、かくて永久に平和は得られざる也、

○家庭に於ける家族の意思は少くとも或程度までは共通ならざる可らず、是家庭調和の源泉也、兄弟の子供を養ふに兄のみ美食に飽きて弟獨り粗食に就かば兄弟の調和は缺けん、否單に調和の缺けるのみならずして兄弟の情誼は缺けん、是兄弟喧嘩の始め也、家庭の亂漸く生せん、

○世にはこんなことは判りきつた事なれども事實斯の如きことが存在するを如何せん、お前は西へ己は東へは、餘りなきことゝ思ひしに、事實それがあるのに驚きたり、吾人は家庭の趣味は調和にあるを思ふとき、如何にしても此の如き純自個主義の存在を喜ぶ能はず、吾人は繰返す家庭の趣味は調和にありと、

家庭論（其二）

○家庭に諸種ある、華族の家庭あり、紳商の家庭あり、官吏の家庭あり、腰辨連の家庭あり、勞働者の家庭あり、其他數へ來らばまさに百を以て數ふべし、

○貴族の家庭は樂しき家庭なるか、否此處も亦人間の住家なりけり、豈に春を不斷と樂むことを得むや、彼等貴族の生活はパンの事に心を傷めざるに引かへてあらぬ、心理的作用に惱まざるゝ也、風波の立つは下流の家庭とのみ思ふ可らず、上流社會は思ひがけなき風波のあるもの也、

○予は諸種の家庭の中かの腰辨連若くは勞働者の家庭に於て比較的に其眞趣味を發見するもの也、見よ彼等が晨に家を出てて其日の行務をいそしみつゝ暮に柴門に歸れば稚子良妻門に待つ、如何に嬉しき家庭ならずや、生活は何處にありても出來るもの也、唯其が眞の趣味を以て爲し遂げ得らるるや否やは全く家庭の良否に存す、

○されど今の世の中流已下の家庭は多くは生活難の爲めに苦しめられて、眞の家庭の趣味を解する能はず生活難其物が家庭の要素なるかの如き奇觀あり、是豈に滑稽なる現象ならずや

○生活せんが爲に家庭あるにあらず、家庭あるが爲に生活する也、生活は屬性也、家庭の趣味は主性也、是を諒解せずして局々として日夜生活の事に奔走す、此輩豈に心に平和と滿足とを樂むことを得むや、

○家庭には理想なかる可らず、然り理想は個人にもあれども、うは個人自身の理想にしていまだ共通の理想にあらず、家庭に理想なければ家庭の品位なし、品位なき家庭は墮落せる家庭也、光明なき家庭也、すでに光明なし、豈希望あらむや、是罪惡の家庭也、暗黑の家庭也、

○英雄偉人は此處より生れ來りし、うは皆一個幼なき兒童より生れ來りしにあらずや、家庭若し暗黑にして、光明なく、信念なく、理想なく、制裁なく威力なくば、焉んぞ此中より

偉人を生み英雄を生まんや、英雄を生みし家庭は、かゝる暗黑のものにてはあらざし、

○家庭は其一家の品位を試驗する處なれば、成るべく整然秩然亦毅然たるを要す、座敷へ通りて床の軸にて、先つ其家の品位を忍ばせざる可らず、

○床の軸物に就て其家の品位を忍ぶ、是豈絶好の問題ならずや曾て予さる人を訪ひしに、其家の床に掛けたるは大原御幸の一軸なりき、予は覺ゑずハッとしたりき、

○予は何故にハッとしたる、うは其軸の帶べる情景か實に崇美清楚なりければ也、やかてつら〳〵思ふ樣、如何に此家の人々の奥床しさよ、大原御幸は人生に於ける歡喜と悲哀と榮華と衰亡とをあはせ見る情景也、此の情と景とを樂むの人は豈に尋常一樣の俗物ならずや、其人たしかに氣高く、あはれ深く、何となく、人を引附る氣品あらんと思ひたりき、

○あて事はいつもはづれる習ひなれど、此丈はやや少しはあたりき、

○家庭は必ず美觀なかる可らず、美を好むは人の天性に屬すいはでもの事なれど此家庭趣味の一半はたしかに美の配合に依つて得らるゝ也、家庭には美なかる可らず、

○家庭の美をして女子にのみ委ねずして男子に委ねしめよ、然らば其美は雄大となり、家庭も亦雄大とならん、

史傳

不受不施史料（三）

梶木日種

日奥申樣、各終日の御口入誠に畏入て候、雖レ然最前より申つる筋目の外には別に新しく思案の替る事は候まじ只とく〳〵いかやうにも被二召行一候へと申せしかば、奉行衆即日奥をひッ立て奥の座へ召行れ候、是何なる所爲ともしらず候き、日奥に付んとする僧衆をば皆悉く引放て只一人國主の御前へ召出されぬ、而して座敷の體を見候へば、案の如く彼邪人共御前に並居たり、又其に指番て藝州の安國寺並學校三要なども列座あり、國主は念佛者にて御坐す故、地體當宗を嫌はせ給ふ上、某重々の御掟を一も御請不レ申一一返し候しかば、以の外に憤らせ給ふ御氣色無二申計一、上に隨ふ下なれば御前に有し大名小名皆以一同の怨嫉也、彼邪僧は當座吾謗法の恥を隱さんが爲に能味方を設けたりとや思ひけん、内々心を合せたる事なれば居長高くなり大音聲を上て無盡の僻見を申狂ふ、其有樣誠に興醒る事共也、或は妙の重は善惡不二にして謗法も不苦由を申し、或は取捨得宜不可一向の釋或は若深識世法即是佛法

の文を引曲て、後日の難非をも不レ顧散々に申散す、餘りの物狂はしさに祖師の立義も一往の方便にして實義には非ずと申し、剩安國論の龜鏡をも只一言に申破りぬ、高祖大士は安國論を以て白樂天が樂府にも越佛の未來記にも不レ劣書玉へども、日紹が口に値ぬれば虛妄の書となりぬ、此事は御前に有し大名小名皆悉聞玉へる事なれば諍ひ有べからず、悲哉惡比丘一旦の名利の爲に三寸の舌を振て諸佛の命根を斷、歎哉暫時の恥辱を補んが爲に大妄語を搆て無間地獄の道を開きぬ、佛法の苗を食失ふ大蝗蟲人天の眼を抉取る拔自烏此國に出現せり可レ恐可レ悲、日奥此等の大僻見を聞に餘りの邪義なれば返答に可二立入一義にも非ず、其上兼て如意論師の遺誡を聞し事なれば强て諍に不及、則國主に申して云、抑當宗として謗法供養を不レ受事は祖師已來の制法天下無諍義に候、然處に彼邪僧共佛祖の掟を破て謗施を受候故に身の恥を隱さんが爲に無盡の僻見を申す、加樣の大邪義をば取上給て御沙汰に可レ被レ及事にも非ず、其上前代の御敕書折紙等を披露せしめ候上は、彼邪人等に被二召合一不レ及事也、然れども宗義の道理猶有體に聞召んと思召ば判者を被レ立候へ、經文釋義正く紙面に載て可二申上一候、今口に任て烏を鷺と申ても判者無れば理非可レ分樣なしと申ければ、國主嗔らせ給て、紙面も無レ用只妙の重に於て他宗の供養を不レ受事あらば只今此座にて可申被レ仰、日奥押返して申樣、妙の重に於て謗施を嫌ふ事勿論に候、但し昔より對論の法として判者記錄者を被レ立双方の證文を書載て勝負を被レ決候、然聞今も有體に邪正を糺さんと思召ば對論の法の如く判者記錄者を被レ立候へ、雙方の義を紙面に載て理非を可レ決と申ければ、國主仰云、年來の學問は加樣の時の爲也只直に可レ申何ぞ紙面と云耶、茲に邪僧大に力を得て申樣、御掟の如く紙面は不レ入事に候只直に問答可レ致申す、日奥曰、汝等無二道理一故に紙面を嫌ふは大誑惑也、當座の辯口を以て理を云紛らかさんとするは比興至極に非ずや、即國主に申して云、今邪僧道理を申掠め文釋を引ども本文の心に背て沙汰の限なる邪義を申す、雖レ然記錄に不レ載判者無れば邪正不レ分候、所詮紙面の勝負は互に理非無紛道理憲法なる者に候、是又先例無に非ず、昔南都北嶺の法論も紙面を以て被レ致證據歷然也、其上只今御尋は妙の重の御不審也、而に妙の重は佛法の極談甚深の理にて天台妙樂の釋義も以外廣博に候へば卒爾に難二申宣一候、而を邪人等道理に詰り候故、大に邪義を巧出して妙の重の義理を申曲當座に勝負を決せんと申は大誑惑の心顯はに候、畢竟妙の重を委く聞召んと思召ば記錄に如事は有べからず候、御前に於て高聲の諍論且は慮外且は尾籠の至に候歟、只神妙に紙面を以て聞召るべしと申す、國主仰云、大佛の出仕を嫌は只一

人也、衆僧は不レ苦云汝若輩として衆義に違するは法華宗の魔王也、日奥申して言く、佛法の邪正は全く人の多には依ず只經文に叶を以て本とせしめ候、其上末法に正法の者少しと申事は已に佛陀の金言に候、故に涅槃經に正法の者は爪上の土謗法の者は十方の土の如しと說れて候、自讃に似ては候へども經文の正義に任せば某一人こそ正法の者とは見へて候へ、爰に國主道理に被レ泥深く憤らせ給て、加樣に强義を云者は天下の大事を起すべし、只流罪に行ふべしと被レ仰、日奥押返して申樣、五年已前寺を罷出し時より身命をば已に佛法に奉り候、流罪死罪の義今更不レ驚事に候と申て座を立候さ、日奥一言の錯りあらば斷頭にも及べかりしが、さすが道理稱成せし故に死罪をば免れぬ又親類檀那も大難に及事なく只予一人流罪に定られぬ、爰に邪人共國主の强く惡み給者なればいか樣の僻事を致したりとも御咎も有べからずと存するに依て、大勢の中に取籠、惡僧ども立悪て予が袈裟衣を奪ひ候、其時予心に存ずる樣、吾朝に佛法始て渡りし比守屋等の大惡人佛法を嫌ひ僧を惡み豐國法師等の三衣を剝取て策を加へたり、高祖大聖人は數百人の謗法者に取籠られ給て岩瀨の少輔房に懷中の法華經を奪はれ第五の卷を以て面を三度打れ給ふ、昔と今は替れども佛法に付て大難に値惡人に責らるゝ事は少も替る事なし、某下賤の身として末代に生を受といへども祖師の絕たる跡を繼てかゝる大難に値事生々世々の悅び何事か如之、餘りに嬉しく候し間諸人に向て宏言を放ちし事共繁ければ不レ註

かく奥師は大坂城にて流罪と定まッたが、直ぐには處刑されず一旦小泉へ歸るとになッた、そこで極月の雪中に守護正議論を著はされた、此の書は大坂城中にて邪僧共が主張した邪義を一々摧破し宗制の正義を唱道したもので、元より遠島で朽ちる覺悟であるから此の書を遺弟の形見としたのである、然るに邪僧共は此の時大坂城内で日奥と問答して勝ッたから其の三衣を剝取ッたと云觸らし、又虛僞の問答記錄を作爲して世間を瞞着した、依て奥師の弟子の日藏と云ふが、直ちにうの僞書を破折したる著書を公にしたとである、而して奥師は慶長五年六月に彌ょ對馬へ流罪されるととなッた、その間の消息を又御難記を引て示さう

四箇年已前大坂に於て御勘氣を蒙りし時、直に被レ流候はゝ一向一思にて少は心易き邊も候はんに、又々丹州へ被二押歸一候、小泉へ罹歸て見候へば弟子同宿等も皆々散失、最寥たる山中に御勘氣の身と成て召使候者一人も候はず物哀れなる有樣、殊に大雪降て路を埋み候へば問來る人も候はず、今日流さるる明日流さるゝと申て跉躡候し程に、年も明候へば又流罪御赦免の由方々より申來り候、實は無過身にて候間さもや候らんと存候へば、又一方よりは流罪

一定たるべしと申す、往もせず留りもせず中有に懸りて中〳〵心苦しく候し事心も言も不レ及候き、本より流死の二罪は覺悟の前に候ひし間、一身の事はいか樣に成候とも其段は不レ驚候しが、某に同心の僧衆並に弟子等の行末いかゞ成行候はんずらんと是のみ心煩しく候き、其間敵方より夜討にせんと申す沙汰あり、又人の通ひを止めんが爲に忍々に人を付置て窺ひ候程に、邂逅見舞の人々にも參詣の旁にも見參申事も叶ひ候はず、依レ之遠國より諸々來り給へる人々にも對面を不レ遂空しく歸し候き、誠に劔の上を越湖氷を踐心地して一日一日と罷過候程に、五月の末方有方より公儀の御掟として明日必小泉の住處を破却せらるべき由、慥の沙汰承り候とて立文持て來り候、然間内々其覺悟を致し待居候し處に、同晦日大坂より流罪の上使到來、候又良有て新在家より清水紹務、松田よりの内狀を持て走り來て曰、さても御流罪の儀今迄相延候間よもと存候し處に、昨夜大坂より如レ此折紙到來候と、云も敢ずはら〳〵と落涙せり、日奥申樣、年來願ひ申つる事此事に候はずや、是程の大願成就の喜を何とて歎かれ候や、某懶惰懈怠の身たるに依て父母師匠等の大恩德未だ一塵も報せず、今佛法の御爲に遠流の身と成候大功德を以て自身の罪障消滅せしむるのみならず父母師匠親類檀那等之恩處に一一是を報じ候はん事、大なる幸に非やと申て歸し候き、則六月朔日、丹州を罷出べきに候つるが、大雨降て候故に朔日は逗留し、二日に小泉を立て其日大坂へ罷付、同六日に大坂を立て三百八十餘里の大海を凌き同廿六日對馬へ罷付候、路次の間の難堪思召し遣れ候へ、地體暑氣に被侵所勞氣に候し上、纔なる小船に大勢の者一に乘込、六月土用炎天の最中に照日と燒火とに責られしかば、所勞彌重く成露命已に危き體に成候き、餘りに心苦く候し時は、只一思に海へ飛入んと存候しが、此年比數度の大難を凌ぎ今と成て心短き事を致し候ては、還て無二甲斐一名を取佛法の名折にや成候はんずらんと思返して留り候き、偶島に着て候へば本より無佛世界の島にて候上知たる人は一人も候はず、府中より七八町の奥人倫離れたる山陰の荒たる小家に指入て一日一日と年月を送り候云々

常樂院日經上人が上洛して妙滿寺に蒞されたのが丁度奥師流罪の年で、經師は大の折伏家であッたから大に在京の邪曾共を強折された（經師の傳記は先年木誌に連載さ れてあるから參照ぜられたい）經師の法難が大に奥師の身の上に影響した、うれは彼の經師の江戸問答の後家康が念佛無間の法門は經文に證據ありや否や等の問を諸法華宗に下だした時に、矢張對馬の奥師へも下問したのであるが奥師が答書を認めたのが、翌慶長十四年三月のとで（關東の諸寺は其年即ち慶長十三年極月、京都より矢張翌年三月に答書を提出）うの下問の箇條は

一　念佛者墮二無間地獄一經文證據事

一　天台六十卷中念佛無間法門有レ之否乎事

一　日蓮聖人宗旨建立者私之義歟將有下經文證據上歟事

已上三箇條であッて、奥師は諸法華宗の軟骨漢とは大反對で經師と同じく一々證文を擧げて返答を書た、奥師自身は此の時心窃かに宗義の邪正を糺明せらるゝ時機が到來したとと喜んで居られたが、案に相違して此の書の成る前月已に經師の師弟は處刑を受けられたのであるから、此の返答書は空しく奥安法印の手許に抑留されるととなッた、のみならず常樂院師法難の後は法華宗の事とし云へば、一言も申出るとが出來ない爲體となッた、それが爲めに奥師の在島も長引くととなり終に十三ヶ年間も艱苦を嘗められた、師は在島中に大に内地より書籍を集めて著述に盡瘁された、中にも淨土家の學者實慧の「擯邪興正集」に對しては「斷惡生善」と題する三卷の破書を造り、又當家の惡僧練意が今昔の圖を混同せる邪義を破する爲めに「圓珠眞僞決」上下二卷を著はし、其他練曉神明記、研心鏡等の著作は、就れも有益な著書であるから序に紹介をする

さて奥師の赦免は慶長十七年の春であッて、其の年六月八日に妙覺寺脇坊延藏院へ還歸された、其の前後の顚末は神秘的な話もあり隨分面白いが、兀長に涉る恐れもあり、錄内啓蒙二十九の七十一丁以下に「奥師一代行業記」を引いて載せられてあるから茲には畧するとした、聖慶長十八年には所司代板倉伊州が駿府へ下向する時に奥師も同行して家康に見恭し、扨又京都大佛は彼の文祿五年閏七月の大地震の折に佛體悉く破損したから、信州善光寺の如來を其の跡へ安置したが慶長三年八月將軍塚が鳴動し、又此の如來の住處には災難が起ると世間で云觸らした爲めに顧かに信州へ歸へし、更に金銅の大佛を造立したが、佛體漸く成らんとして佛身より出火し佛體は勿論大殿まで悉く灰燼となッた、これは慶長七年十二月四日の事で、其の後同十五年六月（或云十四年春）又大佛を再建し始め同十九年四月落成して堂供養の一段に至り、鐘銘の一件より俄に天下の大亂起り、即ち十一月には大坂冬の役となり十二月中旬僅かに媾和したが翌年（此年七月元和と改元）三月大坂方再擧を企て四月夏の役となり、五月八日遂に豐臣氏は滅亡し七月豐公の廟を毀ッた、是に於て奥師が豐公に出された亡家亡國の讖書は全く符合し、隨て大佛供養も慶長十九年限り止まッたのである、奥師は歸洛しても大佛供養の止まぬ内は妙覺寺の本坊へは移られなんだので、漸く元和二年三月廿三日に至り本坊へ歸られ、同月二十五日滿山の衆徒は本堂に於て一同改悔をし、奥師より久成院外二僧を使として懺悔以後更不作の義を一同に仰渡された、同年卯月の比に筑前博多問答山勝立寺の唯心院日忠が上洛して、奥師と諸寺との間に入り和睦の扱をした結果、同年六月廿一日妙顯寺日紹が諸寺の總名代として妙覺寺へ出向して改悔の作法

を濟ませ、同月廿七日に妙顯寺に於て諸寺の貫主會合し、奥師も臨席して茲に芽出度宗内の紛擾が全く鎮靜したのである是れより先き慶長二年に池上の日惺師態々上洛して奥師と諸寺との中に入り調和を計り公儀へも上書されたが成功せず、又關白の母公瑞龍院も手を盡され、他の貴顯達も數度盡力されたが、何時も不調に了ッた、うれが爲め奥師は前後十八年間艱難されたので、幸に今度は時刻到來して圓滿に調停されたのは、誠に結構な事である、次て同九年十月十三日付で秀忠將軍より不受の折紙を賜ッた、其の文は次の如くである

法華宗中之事依レ爲二祖師以來之制法一不レ受二施他宗之志一殊者諸勸進以下不レ出レ之儀尤得二其意一候向後京中江勸進之儀申出旨雖レ有レ之當宗之儀者任二先規例一可二相除一狀如レ件

板倉伊賀守
勝重　在判

元和九年癸亥十月十三日

法華宗眞俗中

依ッて同月二十日京都諸寺が會合して法理一統の連判狀を次の如く調製した

（京都諸寺法理一統之連署）

此度板倉伊賀守殿織目之御折紙仁付而遂衆會重々談合仕任二先規一申請之上者可レ爲二諸寺一統一候於二此義一毛頭私之異儀有間敷候爲レ其連署如レ此候已上

元和九年登亥十月二十日

（諸寺會合次第）

妙覺寺本立坊　妙顯寺增長坊　法音院　本法寺常光坊　妙蓮寺芳德院
本隆寺安住院　本國寺一要坊　龍華院　本能寺圓光坊　妙滿寺成就院
要法寺信行院　妙傳寺最上院　寂光寺信行坊　頂妙寺學立坊
本禪寺本寂坊　立本寺玉藏坊　東陽院　本滿寺玉持坊　巳上

此の時又特に本滿寺住持日深より奥師へ世出通用の書簡を送り來ッた、斯くの如くにして大佛事件の葛藤は茲に全く融和し、宗運萬々歲を謳歌したのである、此の時分には未だ不受不施と受不施との分立はなかッたので、彌よ兩派に分れたのは身延池上對論以後の事である、是れより項を更めて其の顛末を記るさう

春の夜

春の夜に平家を語る法師かな　秋峰
春の夜や女笑はす楫なし言　弄月
春の夜に妻娶るべき話しかな　翠溟
春の夜や連歌に更けし夜半亭　露聲
春の夜に天女を刻む佛師かな　雲老
春の夜やまた戀知らぬ文使　鳴雲
新婚の旅行も春の夜汽車かな　哲夢
春の夜や喧嘩果てたる人通り　梅影
春の夜や肩叩かせて物語り　春友庵
春の夜や戀しと思ふ人の要　南山樓

雜報

▲明石佛敎僧俗同盟會の設立　能仁諦明師明石に於て下の如き趣意書の下に同盟會といふものを設立せられたれば左に掲ぐべし

明石佛敎僧俗同盟會設立趣意書

文物燦然として内に文明を裝飾し武威赫々として外に國光を發揚す國運の隆盛なる振古未曾有なりと雖も顧つて現今精神界の狀態を觀察するときは道心日に微なるの嘆なくんば非らざる也抑も道德の頽廢社會の墮落其由來する深く且つ遠しと雖も要するに宗敎家の墮落は社會をして宗敎を誤解せしめ信仰を怠らしめ終に信仰なく道義なきの社會たらしめたるに因らずんば非す之れを匡正救治するは實に目下の急務にして唯法律と敎育のみに依賴すへからず須らく活潑なる宗敎の眞生命を發揮し社會及び家庭に熱き信仰を附與し活たる道德を扶植し以て精神的生活に充分なる滿足と慰安を與へざるへからず余輩不敏敢て其任に堪るものに非らすと雖も今回同一信念を抱くの僧俗相集まりて茲に精神的團体を組織し以て大方志士と倶に奮て社會匡正の萬一を補助せんと欲す今や開闢以來の國難に遭遇し朝野爲に忙殺せられ殆と他を顧みるの遑なき時に當り此の擧の如きは一見迂愚の感なきに非すと雖も而も文明なるものか鐵と石炭との利用の謂のみにあらさるを知らば亦決して無益の業に非す希くは江湖の同感の士來つて本會に翼贊せは幸甚

聖祖出世の大願

日蓮に非んば我國を救ふべかず日蓮は當帝の父母なり我日本の柱とならん我日本の眼目とならん我日本の大船とならん等と誓ひし願やぶるべからす

南無沙法蓮華經

明治三十八年二月　發起人　播州明石町大藏谷　圓乘寺

石巻清隆、藥師寺卯兵衛、奥田力、藥師寺市藏、大森文麿、中村初藏、松本助藏、地内萬吉、堀由喜、三輪新太郎、賀川滿塲、市村正道、橋爪榮助、岡本勇藏、大原淺次郎、鏑木登喜雄、吉川平三郎、高島正領、吉田順藏、成定庄兵衛、永田善次郎、中塚宗助、植田虎之助、中澤松太郎、松島貞固、前田考典、寺谷長兵衛、安藤宗七、澤田隆三、白井良助、中山美雄、石村源藏、鳥羽市松、竹原林藏、西馬時藏、八木文藏、中瀨市造、正木千代、松島龜吉、末廣富造、

會規

一本會は佛敎の本旨に基き道義を培養し品性を陶冶して國民の品格を高る事

一本會は佛敎の眞理を布演して社會の迷信を打破し健全なる各自の信念を確立せしむる事

一本會の目的を達せんか爲に左の諸項を實行する事

一時々高僧碩德及ひ佛敎の大家を招聘し佛敎演說法話說敎を公開する事

一佛敎の精神たる慈善敎育救濟等の事業を奬勵する事

一宗敎倫理家庭敎育等に關する平易にして有益なる刊行物を廣く施與する事

一本會の旨趣を贊成し事業を助力せんとする特志家は男女を

論せす何時にても會員たる事を得る事
一本會の費用は特志家の義金及會員の出金を以て支辨する事
但し會員は壹ヶ月金五錢を支出する事
一本會の行動は總て評議員會に於て議決し幹事は其決議に基き諸般の事務を執行する事
一本會は會員中より幹事五名評議員三十名を撰定する事

附言

本會の趣旨御贊成の上入會御希望の方は最寄發起者へ御申込可被下候

▲岡山通信　皇軍大捷又大捷、佛子百萬の快男子が、彼處に攻め寄せ彼處を攻め取り、此處に押し寄せ此處を押し取り、數十百の要防要禦の城塞は既に我手に握り、彼敵軍が其大防禦要地たる遼陽城は是れ又我軍の占領する所となる、その壯絶快絶の内に目出度征露第二年の新春を迎へ、軍氣益々昇輝せるの曉、彼の難攻不落の堅城を以て誇りし旅順も遂に開城の止むなきに至らしめ、乃木將軍の手によりて、今や日章旗は城頭に飜々として國威を海外に誇るものゝ如し、戰捷國民としての吾人、佛徒としての吾人、爲國爲君大法祝盃三度なかるべき、此時に當りて世の所謂宗教家たる者豈盡す所なくして可ならんや。

我篤信會に於ては去る一月十五日(午后七時)山崎町本行寺に於て新年初會の佛教大演說會を開催したり其演題及び辨士は左の如し。

開會の辭　能仁事一
弔祭の本義　高田日暢
戰爭觀　大橋日襲
軍國民に告ぐ　野老乾爲

聽衆無量二百餘名、各辨士順次登壇、輕妙快絶なる廣長舌を以て、戰捷國民として宗教を論じ、他宗派と本宗の異點を懇切に說示し、以て顯本妙義の實益を說き、滿堂の聽者をして感動の色を表せしめ、拍手喝采の中に無事散會を告げしは正に十二時なりき。(因みに當日山名木信山本容廣兩師も參會されたりしが時間經過の爲め出演なかりしは一同の遺憾とする所なりし)

二月十五日午后七時より大演說會を本行寺に開く、演題及び辨士は左記の如し。

開會の辭　幹事
吾人の價値　松崎事成
人世は苦哉將た樂乎　山本容廣
法華經の吾人に與ふる慰安　能仁事一

無事閉會せしは十一時過ぎなりき。(みなみ生)

●京都信通　一月十八十九日例の如く妙滿寺に於て佛教大演說會を開く刻下時局の際參聽者は平時に增して多かりき、當日の演題は

五種の修行　銀井乾升師
信心最要を論ず　鈴木孝碩師
法華經講義　野口義禪師

十九日は

佛教の變遷日蓮の開宗　三好信道師
安國論講話　北村通正師
義勇艦隊擴張に就いて　野口義禪師

國光婦人會の發會式　一月十三日を以て妙滿寺に發會式を擧行せり同會は妙滿寺婦人講の改稱せしものにして從來唯だ舊守を以て心一結の躰なりしが、今や我國の一大飛躍は唯だ舊守を以て甘んすべからざるを覺り、會名を國光と改め宗教的事業は云ふを俟たず、進みては社會的活動も爲さむとのよし、げに殊勝のことゝ云ふべし當日は會員全躰三ッ橋の徽章を胸間に輝かして、威容甚だ賞すべきものあり、幹事の選擧餘興等にて閉會せり

●白井師の葬式　豫て通信し置きたる日照師の本葬式は豫定

の如く一月廿四日を以て妙滿寺に擧行せられたり、當日は上人生前の宏德を慕うて會葬せしもの甚だ多く、遠く房總のはてより、岡山大阪近畿の僧俗にして會葬せしとの極めて多かりき、今ゝの重なる人を擧ぐれば、上總よりは白鳥開安師、大阪よりは清瀨貞雄師、岡山よりは能仁事一師及久城茂太郎君等なりき

午前十時梵鐘と共にいとも壯嚴なる式を擧げられ、野口部長導師として、上人生前の事歷を嘆德し、次に中田日蓮大僧正の吊文代讀あり、牧田日禧大僧正の吊文代讀あり、清瀨貞雄僧正の吊文朗讀、能仁事一僧都の吊文、鈴木孝碩師の吊文山内日櫻師の吊詩(代讀)信徒總代富永東一郎君の吊文朗讀等あり、午後一時全く式を了れり、因に記す當日富永四方兩氏の斡旋は非常なるものなりしと、

●京都婦人報國會追吊大演說會　廿四日午後六時白井上人の葬儀を機として、妙滿寺に開く、之れ上人の生前同會に盡す所あるが故なり、當日は近來稀なる盛會にして、さしもに廣き堂の内外は人の山を築き、開會頃には最早や立錐の餘地なし、當日出演者は、

(開會の辭)小林芝香女史、(戰地視察談)小松盛忠君(國家の安危は法の邪正に因る)能仁事一師、(軍國)清瀨貞雄師、(靈魂論)野口義禪師、等にして十時無事閉會

●本山大法會　昨年は時局の爲め延期と相成りたるも本年は日露戰役戰病死者追吊會を兼ねて特に盛大に執行せるゝ趣にて各教區登山僧も宗規々定の外特志者の登山を希望せらるゝ由

●大學林の常設　同林は毎年速成科を開設し短期の教授を爲しつゝありしが今回職員協議の結果本年四月以後常設開林の事に決したる由にて別項報告の通り本月中に入學生徒を募集せらるゝと云ふ

▲祖像分影の發願　本邦彫刻家の大斗にして東京美術學校教授たる竹内久一氏は今回祖像分影の義を發願せられ左の宣疏を發表せられたり委細は追て宗内各雜誌に廣告せらるべしと云ふ

聖像分影發起の宣疏

謹て案ずるに　高祖御尊像弘傳の事は、遠く御在世に肇り時に御自作ありと雖、主として聖容弘傳に任じたるは、御弟子日法上人なり、蓋し聖容弘傳の一事は、彼の法門相承の大節と相待て、俱に宗門傳持の一大要件たり、若し此一科を缺かんか、世は法界唯一の大恩容を記し得ざるのみならず、本尊觀請の規模を失して、終に修行の正的を全ふすることを能はざるに至らん日法先師、天稟の生涯を貢獻して、るの信念洪妙の理想と相諧ひ、うが美術的の靈腕、その絶大萬年靈鎭の模を留む、偉なる哉功、矧や終身の間聖容の外何のものをも刻作せざりしといふに至ては、眞に是れ世界美術史上の一大異彩、其妙技は「毘首羯摩」「鳥佛師」に匹儔し、而して其用意迥かに過ぎたるものと謂ふべし然るに其手刻の尊容、概ね巨鎭大作にして、敎徒戸々の分影に便ならず、而も信者渴仰の厚き毎戸必ず奉安せんとす、本山之を管せず、宗政之を導かず、己むことを得ずして之を市に需む、工人商估これを店頭に列ね、全く一種の物品として賣買せらる、惡刻俗容些の尊嚴を有せざる、固より其所なり、噫幾百歲の久しき、宗徒の本尊寶塡は、斯くの如き汚瀆を印して怪まざりき、敎行風紀の雜亂亦故なきにあらざるなり

不肖久一何の宿福ぞ、今を距る十八年前、一朝本化の敎光に浴し、洗然舊宗所捨て、幸に一乘の授の身となりぬ、爾來深く心に誓ふ、前きに、尋で博多灣頭の尊容を謹刻して、世界統一の聖主を形說し、神武天皇の尊容を以て大法護持の實を舉げんと願ひ、猶進んで聖像を奉刻して、世界統一の師父を世に介し、鑄造分影の方法を以て、天下一型戸々奉安の本尊たる鎭の聖容の利を彫現し、正しき尊容の隈なく普及せられ、以て萬代信行の規模を與へ、固にせんことを志し、博く古像古畫の聖容を參照し、傍稽古考證を史實に致へ、ほゞ心目の及ぶ限りを盡し、刻案既に成て、時の吉を窺ふ、こゝに明治三十七年謹て案ずるに　高祖御尊像弘傳の事は、遠く御在世に肇り時に御自作ありと雖、主として聖容弘傳に任じたるは、御弟子日法上人なり、蓋し聖容弘傳の一事は、彼の法門相承の大節と相待て、俱に宗門傳持の一大要件たり、若し此一科を缺かんか、世は法界唯一の大恩容を記し得ざるのみならず、本尊觀請の規模を失して、終に修行の正的を全ふすることを能はざるに至らん日法先師、天稟の生涯を貢獻して、るの信念洪妙の理想と相諧ひ、うが美術的の靈腕、その絶大萬年靈鎭の模を留む、偉なる哉功、矧や終身の間聖容の外何のものをも刻作せざりしといふに至ては、眞に是れ世界美術史上の一大異彩、其妙技は「毘首羯摩」「鳥佛師」に匹儔し、而して其用意迥かに過ぎたるものと謂ふべし然るに其手刻の尊容、概ね巨鎭大作にして、敎徒戸々の分影に便ならず、而も信者渴仰の厚き毎戸必ず奉安せんとす、本山之を管せず、宗政之を導かず、己むことを得ずして之を市に需む、工人商估これを店頭に列ね、全く一種の物品として賣買せらる、惡刻俗容些の尊嚴を有せざる、固より其所なり、噫幾百歲の久しき、宗徒の本尊寶塡は、斯くの如き汚瀆を印して怪まざりき、敎行風紀の雜亂亦故

廣告

本年四月十一日より仝十五日迄大法會執行候條精々御登山御參詣可相成候也

追而本年は日露戰役戰病者追吊法會を兼修仕候

毎日 午前 法要 午後晝夜 演說會

明治三十八年三月十五日

總本山 妙滿寺

全國本宗檀信徒御中

二月、征露宣戰の詔勅煥發せらる、時なる哉千古の快事是れ日本の杜本化大聖の威容、四海に弘傳すべきの秋なり矣、久一欣然として遂に刀を執り、薫沐拜刻功を畢り、明治三十八年二月十六日聖誕の吉祥辰を以て其第一原型成る告ぐ、久一重ねて鎔鑄を督し、進で無數億萬の分身散體を造り奉り、廣く宇内信奉の諸人に頒ち、正眞適格の聖容を弘傳し奉らんとす。願くは行壇内に整正し、敎威外に振ひ、群魔頓に降伏し、一天四海皆妙法に歸せん、十方淨信の四衆、躊躇して好緣を遇す勿れ、分影拜授の淸規は、掲げて別項に在り、

明治三十八年二月十六日聖誕佳節

正六位 勳六等 本化大佛師 竹内久一 敬白

生徒募集

來る四月一日より開林授業候條入林志願者は左記の通り了承の上三月廿五日迄に入學願書を大學林長宛宗務廳に差出すべし

明治十八年三月五日

顯本法華宗大學林

一敎授學科は豫科とし當分本科を置かず

一豫科は宗學科普通科の二とし宗學科は正科（宗乘 餘乘）のみを敎授し副科を敎授せず

一宗學科は單級敎授とし第一學年より授業す

一普通科學生は高等小學二年修了以上若くは現在中學生を入學せしむ

一入學志願者中宗學科生十名普通科生五名を撰拔し補費生とし大凡食費の半額及普通科生には通學月謝を補給す

一中途退學者は補費生たることを得ず

一入學者は凡て入學試驗を爲す

一入學試驗期日は到着の上承合すべし

一入林者は法華經祖書及黑居士衣木闡五條念珠は必ず携帶すべし

前記の外各學科相當の書籍は持參すべし

一入學志願者三月三十一日迄に大學林に到着し庶務の指揮に依り寄宿舍に入るべし

一入學者貪費は一ヶ月四圓五十錢とす

一補費は一ヶ月食費二圓宛を補給す

佛教青年協會編（製本出來）

全一冊

正價金二十錢 郵稅金四錢

征露の軍一たび動きてより陸に海に**連戰連捷**し、日章旗の向ふところ光耀かざるなく**帝國**の武威赫々として四海に普からざるなし是れ實に陛下の御聖德を上に載するが身に**犧牲**に供して誠忠し報恩の結果によるものなりされば**吾等兄弟**は其死傷を**弔慰**し其**大捷**を賀せざる可らず**近來吊祭祝賀の文範**朝野の間に出版せるは此需用に應せんとするにあり然るに此等文範として價を失へるの觀あり之れが缺けたるを滿し漏れたるを補はんとして編纂せるものは本書たり斯書は文體及び考ふるに其多くは一時の間に合せに過ぎざるものありて**杜撰輕俳**なる文範を示し**格式**に注意し**詞采絢爛**に**語調新奇**なる文範を載せ附錄として**祝賀送迎文**、**尙近代名家**の**新文例**を載せ上欄には編者が多年經驗により**戰時雜吟**等を載せ上欄には編者が多年經驗により法を示し斯文の資料及び東西名家の名言佳句を蒐めて成れる初學作文構成の心得並に吊祭文作枝折となすに**戰時模範的文範**を期すること

發行所 東京市飯倉町五丁目 電話新橋二九七二番 **森江書店**

今回命に依り左記の通り夫々轉任仕候間書信等は凡て轉任先へ御發信相成度此段辱知諸君へ謹告候也

明治三十八年二月

千葉縣山武郡豊成村菱沼 法華寺住職 **堀江誠一**

京都府何鹿郡綾部町 了圓寺住職 **吉田完亮**

岡山縣和氣郡和氣町 本成寺住職 **山本容廣**

拙者義從來兼任罷在候岡山縣和氣郡和氣町本成寺住職義今回願に依り解職相成山本容廣師へ同寺後住任命相成候に付寺務一切仝師へ引繼仕候間此段在職中御配慮を蒙り候檀信徒各位に謹告候也

明治三十八年二月

井村恂也

一統

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可　毎月一回　全卅八年三月十五日發行　統一第百二十號　十五日）
（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可　毎月一回十五日發行　統一第百廿一號　毎月一回十五日）

第百二十一號要目

○日蓮上人の宗義及系統（承前）……本多日生
▲清水梁山師の本尊論に就て……相川、白痴、不新
○日什大正師置文諷誦章（承前）……阪本日垣
▲各地教信……
○村上專精師の佛陀論に就て……本多日生
▲南無釋迦牟尼佛……
○寂日房御書……本多日生
▲懺悔錄……野茨花生
○不受不施史料（其四）……梶木日種
▲先更會綱領……
▲次號の像告……

御雛附ぞく
人形
小道具
武者人形
東羽子板
御注文に依り調製致候
東京日本橋通り十軒店
久月本店
中原福藏
（電話本局二千三百八十二番）

基礎金領收報告

下野國上都賀郡東大蔵村下澤
一金壹圓也　木村和吉殿
右御寄贈相成正ニ領收候也

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢　十二冊前金六十五錢　郵券代用は一割增但五厘切手を眞とす
一講讀申込の節は住所姓名を明書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅八年三月十五日印刷發行
發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木暉學
印刷所　北澤活版所
發行所　統一團
東京市淺草區南松山町四十五番地
發行所東京市淺草區南松山町四十五番地　統一團